せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第九十七号（毎月一日発行）
平成九年十月一日

年表で読む古平の歴史

《4》

■請負人が漁場を経営

場所を請け負った商人は、始めは知行主であった藩士の代行として、アイヌの人たちとの交易（物々交換）だけをしていました。一年に一回か二回、それも藩主の許可を受けなければなりませんでしたし、場所内での漁業や木を切ることなどは藩主の許可がなければできませんでした。

また、三年から七年ごとに請け負いの契約をすることになっていましたが、知行主との貸し借りの関係があったりして、いったん請け負うと簡単に代わることはなかったようです。

古平場所を岡田家が約二百五十年間にわたって請け負って、漁場を経営していたということは大変珍しいことであって、そのことが、その後の古平の発展に大きく関係していたと考えられます。

■『一膳箸』の帆印

古平場所を請け負った岡田家は松前に支店を置いて、古平には支配人がおりました。

宝暦元年（一七五一）、六代目岡田弥三右衛門は港町に恵比須神社（今の厳島神社）を創建しましたが、それから五年後の宝暦六年、「東西蝦夷地の場所」を記録した本の中に、

一、婦るびら
　地頭　新井田喜内

とあって、新井田喜内は文書に表れた初めての古平の知行主です。

それから四十年ほど後の寛政十一年（一七九九）頃の本に、

フルビラ　新井田喜内支配
産物　鮭、秋味、鰊、ホッケ、
　干鱈、カスベ、イリコ
右運上金　百四十両
秋味運上金　三十両

とあります。

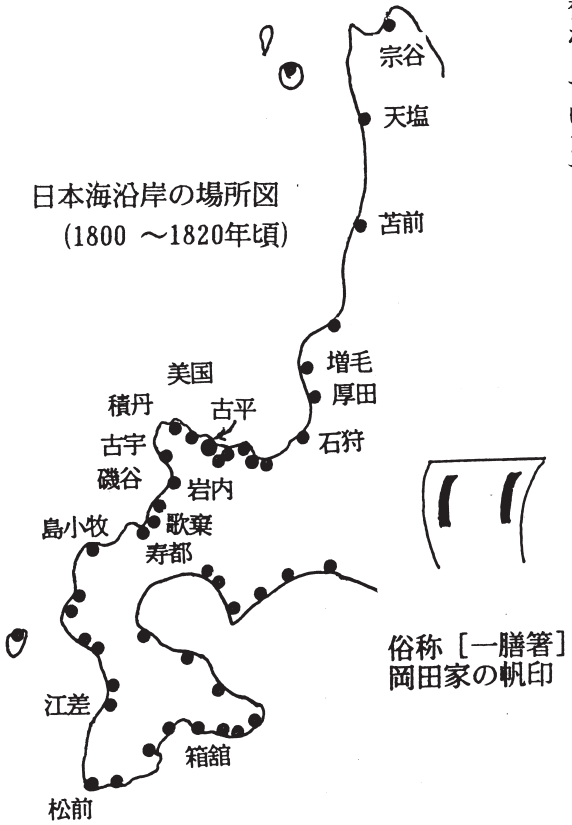
また、これより前の安永九年（一七八〇）別な記録によりますと、

新井田大三郎知行所
　辺路加路石（ヘロカロイシ）
　古ひら　さるまき
　鰊、カスベ、たら、いりこ

とありますが、知行主の名前が替わっています。

請負制度もその後、場所で漁業経営ができるようになりますと、このことによって請負人は莫大な収入を得ることになります。これを支えていたのが日本海航路で活躍した、北前船といわれた弁財船（べざいせん）でした。

請負人の持ち船の帆にはそれぞれ印がついていて、岡田家の帆印は『一膳箸』と言われていました。この帆印をつけた岡田家の弁財船が、日本海を走り廻っていたわけです。



日本海沿岸の場所図
（1800 ～1820年頃）

俗称［一膳箸］
岡田家の帆印

わが町 ふるさと【2】

本間銀朔

昭和二十五年四月に大沢町長さんが逝去され、助役の伊藤由松さんが町長に当選し就任しました。

手持ちの資料によって、町の発展の状況を追ってみたいと思います。

昭和三十二年浜町で、高橋電気商会が初めてテレビの試験放送の受像をしましたが、映像がよく映らなかったため、港町の岩崎直造さん宅に移動して受像したところ、今度はよく映るようになったということを聞いて、早速見せてもらいました。その時はちょうど大相撲放送のをしていました。

その後テレビは、新地町の長谷川健治さん・最上薬店・能登屋旅館・入船町の今良六さんと次々に取り付けられましたが、そこの家はテレビを見る隣り近所の人たちで満員でした。当時テレビは本体が七万円、アンテナが三万円で計十万円はしましたから、庶民にとってはまさに高根の花でした。その後次第に値段も安くなり、今では各戸に二台以上も普通になりました。

昭和三十三年、積丹国道（現在の国道２２９号線）が十余年の歳月と十数億円の工費で完成しました。今までのカーブときつい勾配の山道と違い、古平・余市間の距離は半分の十四キロとなり、札幌まで二時間足らず行けるようになりました。これで鮮魚、農産物などは新鮮なうちに中央市場に出荷できるようになり、バスも一日二十往復になったことから、長い間の定期航路も、十月にはついに運航が廃止になりました。

昭和三十四年に町内で初めて道路の舗装工事が始まり、古平橋から□高野名書店前を通って畑方面、佐々木商店前までの間の工事が行われました。この工事は八月末で完了し、その後も舗装工事が進められ、現在は小路までも舗装されて、昔の道路とは格段の差となりました。

また飲料水も、当時は井戸やポンプに頼っていましたが、西部方面ではとくに金気（かなけ＝水の中に鉄分が溶けていること、その溶けている鉄分による独特の味）が強く、特に水産加工場などでは好ましくないということから、上水道設置の希望が高まってきました。町でもその必要を認めて道にその申請をしたところ、昭和三十七年十二月に北海道知事から水道事業経営の認可が下りました。

水源地として、泥の木川の上流にある観音滝の上から取水することになり、早速工事が始まりました。

昭和三十九年に一部仮通水をし、翌昭和四十年には上水道工事が完了し、竣工式が行われました。

昭和三十五年、旧古平小学校が危険な老朽校舎に指定されたことから、禅源寺横の高台の民有地を購入して、時代に先駆けた新校舎の建設が計画されました。

昭和三十九年八月、鉄筋コンクリート三階建ての新校舎が、工費約二億円で竣工しました。近代的な建築で、特に当時としてはあまりほかに例をみない水洗トイレ等を設置し、他町村から見学者が訪れるほどでした。

当時は二十七学級で、児童数は千百七十四人でした。また小学校には、町立の幼稚園が併置されました。

またこの年、港町の高台に町立みなと保育所の建設が始まり、昭和四十二年末に総工費千六百八十万円で落成し、翌年一月に定員九十人で開設されました。共稼ぎの世帯の子どもを預って保育するものです。

寺子屋から学校へ①

―古い文書を読む―〈2〉

◆寺子屋で教育

江戸幕府の時代には各藩に、藩士や町民の子どもたちを教育するための郷学（ごうがく）と呼ばれる、藩や町民の有志のつくった学校がありましたが、開拓使によって開かれた北海道にはそのような学校はありませんでした。

古平郡では開拓使の置かれる前の慶応元年（一八六五）頃から、当時、新地町にあった禅源寺の住職・大神天山や、漢方医であった熊谷昌庵らが読み書きやそろばんを教えていて、その四、五年後の明治二年頃には、沢江村の松岡直之助（元・伊達藩士）がそこで寺子屋を開設していたと伝えられています。

◆教育の奨励

明治五年十一月、開拓使からは郷学所を奨励するような通知が出されましたが、寺子屋程度のことしかなかなか出来ませんでした。

◆小学校制度ができる

明治五年三月、文部省から初めて、「…人民一般はすべて学ばなければならない…」という小学校四年制の学制が示されましたが、校舎も少なく、また当時の生活状態からも、とてもみんなが学校に行けるような情況ではありませんでした。

◆開拓使が教員を雇う

このような中で明治六年、余市開墾場から堀太沖（身分は分かっていません）が新地町に来て私塾を始めたところ、これを開拓使が雇って、翌明治七年、浜中村（現在の浜町）の真宗寺院内に古平郡教育所を建てて、堀太沖はそこの助教師となりました。しかしこれについては、「明治七年、同寺の留守居をしていた僧の石塚賢蔵が願いを出してこの寺院を教育所とした」という記録もあって、この関係がはっきりしません。

別に開拓使は同年、桂木清助を雇って官舎を教育所として開所しましたので、古平郡内には教育所が二か所あったことになります。

教員は開拓使が雇いますが、施設などそのほかの費用はそこの住民が負担しました。

『開拓使事業報告書』によりますと、浜中学校の沿革は次のようになっています。

・明治七年官舎を仮教育所として使う生徒十七人

・明治八年真宗寺院をもって教育所とする。費用は郡内で負担する。寺を壊し校舎を新築

・明治十年教育所を浜中学校と改称する

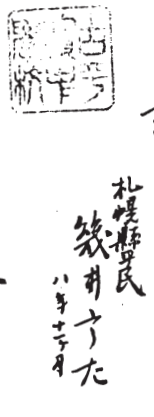
・明治十三年十月浜中学校新校舎が落成、百四十七坪その費用は五千円

・明治十四年仮開校式を行う。明治九年の古平教育所の全費用は百五十円とあります。（内教員月給七円＝年額八十四円）

教員と生徒数の推移

明治年	教員	生徒数 男	生徒数 女	九二六
六五二	二	一〇二	七八	六〇・一八
一一	二	一〇三	九一・三	
一二	三	一二四	一〇六・一八	
一三	二	一二七	一〇四・二三	
一四	六	一六七	一四二・二五	

―続く―



孫たちの夏休み

渡辺ハツエ

「来年は絶対にまた来ます」と、語尾に力を込めたあいさつをして、中学一年生の姉と小学四年生の二人の孫が小さな背中に大きなリュックを背負い、ケースに入ったバットを肩にかけて、叔父に連れられて帰って行きました。仕事の都合上、帰省できなかった両親の分までもお墓参りをすませた孫たちは、この夏休み、初めて両親から離れての旅でしたが、楽しい思いでも沢山できたことでしょう。

小四の孫は学校で野球チームに入っていて、大の野球ファンの叔父の特訓を受けてメキメキ上達したということでした。小さな手に大きなグローブをはめた、孫の健闘ぶりをはじめて見た私は思わず拍手をおくりました。

かえりみると、私の長男も小学四年の頃には、近くの空き地で友だちと野球をして楽しんでいました。野球のボールは、布きれで小石を何重にも包んで丸め、その上を綿糸で上手にくくったお粗末なものでした。バットは家の戸締まりの心張棒でした。夜、私が戸を閉めようとしたら心張棒が無い。

「あっ、忘れてきたな」と、思いながらも、私は空き地へ探しに行くこともしないで、その夜はまんじりともしないで夜を明かしたことが、今では懐かしい思い出となっています。当時、主人は毎晩イカ釣りに出漁していて留守でした。

長男は高学年になってから叔父に立派な革製のグローブを買ってもらい、それは大喜びで、それまで以上に野球を楽しんでいました。

＝女性の出稼ぎ＝
カニの缶詰工場

竹内コト

戦前だと、古平での鰊漁が終わると多くの人が出稼ぎに行きます。鰊漁期の遅い樺太（サハリン）や、カムチャッカ方面への鮭漁などです。また女の人は、道東方面の厚岸・根室・花咲などにあるカニの缶詰工場に行きます。そのほかには余市・仁木のリンゴの袋掛けにも多くの人が行きました。

当時、役場の松岡さんという人が、日魯漁業会社のカニ缶詰工場に行く女工さんの世話をしていて、役場が契約などに立ち会ってくれていたようでした。

古平にいても、特に女の人の仕事がなかったので、会社から賃金のうちから前借りをして行っていました。現金収入の少なかった時ですから、まとまって前借りできたのも大変魅力があったようです。

ところで、いよいよ缶詰工場の仕事が始まりますと仕事も大変なようで、カニ漁の最盛期になると朝早くからたたき起こされ、残業の日が毎日のように続くそうです。女工さんたちは、眠いのも我慢して働かされたといいます。

当時流行した女工さんの歌からも、女工さんたちの働くつらさがあらわれています。

女工女工とばかにするな
女工の詰めたる缶詰めは

⇦（次ページへ続く）

遥かなる故郷の思い出

痛恨！ 戦友松岡外与造さんの戦死

[37]

橘　義春

昭和十八年五月のはじめに、私にも召集令状が来た。これは三か月間の『教育召集』なので、一般にいう「赤紙（あかがみ）」ではなく白紙であった。泣いても笑ってもとにかく三か月間の辛抱である。

盛岡の北部62部隊に入隊したが、二か月後に部隊が解散することになった。これで、「もしかしたら家に帰れるかも知れない。」と思ったが、それは軍隊ではとんでもないあまい考えだった。いつの間にか『臨時召集』に変更になっていて、今度は札幌の北部63部隊に転属ということであった。

「札幌だったら、南方や中国に行くよりずっといいぃゃ」と思っていたら、札幌の部隊全員はすぐに樺太（サハリン）へ移動して、北緯五十度付近で国境守備の任務につくことになった。行き先は気屯（ケトン）という所で、なんでも国境近くの小さな町だという。

いよいよ移動が始まり、稚内から連絡船に乗って樺太に向かった。たまたま乗船した他の中隊に、古平小学校で一級上だった港町の松岡さんによく似た人がいた。当時の高等科は一年生と二年生が一緒の複式学級で、山川勇先生が担任し、一年間一緒に学んだことがあった。他人の空似かな、と思いながら見ていたがどうも本人らしい。間違っていたら謝ろうと思い、声をかけてみた。

「古年兵殿は、古平町の松岡さんではないでしょうか」

いきなり声をかけられて、相手はびっくりしたようだった。

「そうです。自分は松岡ですが君は？」

「自分は小学校で一級下の、山川先生の教室で一緒だった橘です。」

というと、まじまじと私の顔を見ていて、やっと思い出したようだった。小学校の時から一度も会っていないのだから無理もない。

「やぁ－しばらく、いつからこの連隊へ――」

「盛岡の北部62部隊から転属になって来ました。自分は二中隊です。松岡さんは？」

「おれは一中隊だ。となりの中隊でよかった」

お互いに六年ぶりの再会を喜び合い、しばらくはつもる話に花を咲かせた。

それからは兵営のどこで会っても、「やぁやぁ、元気か」と声をかけてくれ、ふるさと・古平の友人や知人からの手紙に書かれているニュースの交換をし合った。

遠く故郷を離れた樺太の地で、同郷の先輩・戦友がいるって頼りになるものだった。

（つづく）

（前ページより続く）

横浜港で検査受け
アラ　女工さん
名前は外国までも
……

多くの人は、そのつらい仕事の中から家への仕送りに励みました。また、人に負けまいと意地でも働いた人もいたといいます。

やがて切り上げの時がきます。その時になって、働いたお金を使い果たした人、辛抱して働いて笑う人、そこには人さまざまの人生があったようです。

むかしは、紡績会社の女工さんなどの話も伝えられていますが、女工さんの悲しい話が多かったのです。

岬短歌会九月詠草

刺身にとしたしき友が大きなるモイを持ち来てくれぬ宵のまつりに　竹内コト

帰郷せし級友と遠き日語り居り離れゐし五十年のへだたり消えて　池田テル

午後三時隣の暖(のん)ちゃんまだぬくき焼きたてのクッキー持ち来てくれぬ　水口キヱ

道端にちちろ虫なく昼さがり無人売場に唐黍を買ふ　東美知

五十年刻経て逢ひしわが先生余りの若さに目を疑ひぬ　田中香苗

山車一つ神輿にお供の秋祭さびしみて暫し道に見送る　鈴木時子

十五夜の芒を取り丘ゆきてとりどりの野の草花にあふ　丹後初江

薄ほほづき活けつつ思ふ幼き日赤き実は口き入れてならしき　越田由起子

短かき命ひたすら生きむと虫すだく真夜の目覚めに音のかしまし　榊佳代

おまつりの行列まねる保育園の園児らかはゆし運動会沸く　山口スヱ

咳込みて苦しむが背摩る孫の小さき手の感触伝はる　菅原節子

トマト苗植ゑむとし庭隅へ移したるみやまスミレに花ひとつ有り　堀昭子

綾とりして糸を夫より指に受け血より濃き夫婦の縁を思ふ　堀典子

ローソク岩が観音像とも見ゆる日よ再びトンネル事故ある勿れ　片山栄志

俳句

古平ホトトギス会

太陽について向日葵たくましく　斉藤波留
積丹の紅葉となりて山深む　越野清治
稲妻の尾の先までも光りけり　大和田絵伊
亡き夫を心にいつも盆の月　仲谷美砂
空母見る双眼鏡に秋の海　仲谷比呂子
蔓末に鉄線一花威をとどむ　水見句丈
久に来し娘等と夕餉の寄せ鍋を　大島喜恵
秋うらゝテトラポットに海猫憩う　仲谷安代
友呼んで月下美人のひらくさま　長谷川和子
葉桜や母亡き庭の車椅子　木村芳園
花栗や丘にパークゴルフ場　岩瀬みのる
孫らしや花持ち廻る花祭　山口浪
描きあげし達磨見てゐる日永かな　越野敏雄
百町の田に稲架二つ見ゆるのみ　福井幸平

ゴリ

福井幸平

今はもうゴリをすくうことも食べることもなくなった。子どものころ、よく川で手ぬぐいを広げて、川下から一人がばちゃばちゃと追い込むと、一人が上で手ぬぐいをさっとしぼる。こんな遊びがなんとも懐かしい。手ぬぐいの幅よりやや広く石を集めて通路を作る作業が少し面倒だったが、大変面白く時間のたつのを忘れてた。

大人も前浜でゴリ漁をしてたが、もちろん、今のこなご網のようにでっかい仕掛けだった。ばけつに入れて、町に売り歩くばあさんもいたし、三平皿一杯いくらという多分安いものだったらしい。

家ではよく茄子を入れた醤油汁にして食べた。大変だしのきいた、さっぱりした味だった。ある年寄りに聞いたら、佃煮にもしたと話していた。まぁいろいろとゴリの食べ方もほかにあったかも知れない。

辞典によればゴリは、カジカ・ヨシノボリ・チチブなどの別称だとあった。チョペタン川、土場の川、古平川それぞれに皆さんの思い出もあるはずだが、文字通りゴリは、追われない限りいつも石にへばりついて休んでいることが多いので、鮴という字を書くのかな？

古平の方言（8）

・しゃっこい＝冷たい
・シャッポぬぐ＝参った、困った
（とうとうシャッポぬいでしまった）
・しゃんべな＝しゃべるな
・じゃんぽ＝丸刈りの頭、髪を刈る
・しょっきばる＝固くなる、緊張する
・しょっちゅう＝いつも、いつでも、常に
・しょってる＝うぬぼれ、自慢、得意顔
・しょっぺい＝しょっぱい、塩辛い
・じょっぱり＝負けず嫌い、意地っ張り
・ごうじょっぱり＝負けず嫌い、強情
・じょっぴる、じょっぴんする＝錠
（じょっぴんかけるぞォ＝錠をかける）
・じょんずだ＝上手だ
・じょんば＝木製の雪かき、羽子板
・しらっぱぐれる＝知らないふりをする、見向きもしない
・しわすけ＝けち、欲ばり
（あいつはずんぶ しわすけだ）
・しんでい＝ひどい、大変だ
・じ（ず）んぶだね＝ずいぶんだね
・すが＝氷、建造物についた氷、
・すがもり＝建物の氷が解けてもる
・すくだまる＝身をちぢめる、ちぢこまる
（寒くて すくだまってだ）
・すぐる＝畑の作物の間引き
・すしにしん＝ぬか漬けにしん
・すすぺ＝口数の多い女、器量の悪い女
・すっかい、すっけ＝すっぱい
・すとふ（すとーふ）＝ストーブ
・ずなる＝大声を出す、怒鳴る、叫ぶ
・すねから＝すね
・すます＝（借りたものを）返す
・せー＝しなさい、精力、気力
（これ食べれば せいつぐょ）
・せっこ＝余計なこと、干渉
（おめぇあんまり せっこするナ）
・せーきれる＝息がきれる、苦労する
（あいつには せーきれる）
・せがせる＝急がせる、せきたてる
・せぐな＝急ぐな、あわてるナ
・せずねぇ＝切ない、つらい、疲れた
・せばや＝そうだとしたら、それならば
・せわしね＝落ち着きがない、うるさい
・ぜんこ（ぜにこ）＝お金
・そうげぇ＝そうかい、そうか
・そんだはんで＝そうだから
・ぞうよ＝出費、経費
・そうだべ、そんだべ＝　＝そうだろう
・そったらはなし＝そんな話

あとがき

十月になりますと、暦に見る行事にも『寒露』（八日）とか『霜降』（二十三日）というように、いかにも季節を感じさせるものがあります。

先月号はワープロの不手際から発行がすっかり遅れてしまいまして、ご愛読の皆さんにもすっかりご迷惑をおかけしたようです。東京古平会の湯田会長さんからはわざわざお電話までいただきまして、お心づかいありがとうございます。今月の九十七号はなんとか予定通り発行できました。

先日、山本清一さんから戦前の写真と昭和二十年代の雑誌をいただきましたが、その中に、禅源寺境内に歌碑が建っている日本画家・今中素友から小町勝治さん（元・古平郵便局長）に宛てたはがきが三通あり、大変貴重な資料が見つかったと喜んでおります。改めてお礼を申し上げます。何によらず、残しておきたいような古いものがありましたらお知らせください。